

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2007年 5月 20日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

| | |
|-------------|------------------------|
| 氏名(グループ名) | 奥田 夏樹 |
| 連絡先・所属など | neritidae@hotmail.com |
| 調査研究・研修のテーマ | 日本型エコツーリズムの自然科学・社会科学研究 |

2. 調査研究・研修結果の概要

A：自然体験型観光による自然環境の利用実態調査

計画では、小笠原諸島で約2週間の日程で実施する予定であったが、沖縄から東京に移り住むなど、一身上の都合により実現しなかった。

B：エコツーリズムに対する導入地域の行政，業界，地域社会による具体的取り組みの調査

Aと同様、諸事情により実施できなかった。

C：成果の公表

新規の研究成果はないので、公表していない。

昨2006年度に助成され行なった研究の主要成果は、2007年3月に発行(5月印刷)された、沖縄大学地域研究所紀要「地域研究」第3号に、論文：「日本におけるエコツーリズムの現状と問題点 西表島におけるフィールド調査から」として掲載された。

D：申請外だが助成課題に関連した活動

日本では、近年観光立国の動きが顕著であるが、本来はそこで生まれ育った人々が、地域的アイデンティティを形成するよすがとなる、風土や物産などを、いわゆる近現代の経済的視点からのみ評価する「観光資源」というものの見方は、風土や物産が育まれてきた歴史過程では経験しなかった、地域のテーマパーク化や物産の持続不可能な過消費をもたらす、マス・ツーリズムを含めた大量消費に繋がる懸念が大変強い。産業としてのエコツーリズムを含む近年の政府、与党による観光立国傾向はこの流れで行なわれていると考えられる。

そこでこうした近年の動きに対し、2006年夏に、永田町で議員、政党を訪れ啓蒙活動を行なった。

3 . 調査研究・研修の経過

・ 2006年5～8月、沖縄から数回上京し、野党議員を中心に面会し、「消耗的観光産業は地域を破壊する」ことを訴えた。

4 . 調査研究・研修の成果

当初申請の小笠原諸島をメインフィールドとした調査研究は、転職やそれに伴う居所変更など、個人的事情により果たすことが出来なかった。具体的な活動実態がある関連活動について、下記に報告する。

・ 申請外だが助成課題に関連した活動（2 . 調査研究・研修結果の概要 - D）

日本では、近年観光立国の動きが顕著であるが、本来はそこで生まれ育った人々が、地域的アイデンティティを形成するよすがとなる、風土や物産などを、いわゆる近現代の経済的視点からのみ評価する「観光資源」というものの見方は、風土や物産が育まれてきた歴史過程では経験しなかった、地域のテーマパーク化や物産の持続不可能な過消費をもたらす、マス・ツーリズムを含めた大量消費に繋がる懸念が大変強い。

地域アイデンティティを形成する諸要素の多くは、高度成長の過程で、全国的な人間の社会構造の変化や地域の乱開発に直面した結果、すでに壊滅的打撃を受けていると思われるが、近年の観光立国傾向は、この時代を辛くも生き抜いた僅かな地域の風土や物産を、僅かに生きのびたが故の希少性を売りに新たに「観光資源」化することで、これらに止めを刺し、地域アイデンティティの崩壊を招く恐れがあると考えられる。産業としてのエコツーリズムを含む近年の政府、与党による観光立国傾向はこの流れで行なわれていると考えられる。

そこでこうした近年の動きに対し、2006年夏に、永田町で議員、政党を訪れ啓蒙活動を行なった。またその後も折りに触れて、働きかけを続けている。

成果については一朝一夕に目に見えて顕著なものは出にくい性質の活動であるので、歯切れの良い説明はできないが、活動の社会的広がり、昨年度と比較すれば確実に増した。また少ないながらも、申請者の考えを真摯に受け止めてくれる知己も得ることが出来た。申請者が理想とする自然・文化と人間との関係を実現させるための道のりは、なお遙か遠いが、社会活動として人的広がりが多少なりとも増したことは、大きな成果であるかと思う。

5 . 対外的な発表実績

・ 新規の研究成果はないので、公表していない。

・ 昨2006年度に助成され行なった研究の主要成果は、2007年3月に発行（5月印刷）された、沖縄大学地域研究所紀要「地域研究」第3号に、論文：「日本におけるエコツーリズムの現状と問題点 西表島におけるフィールド調査から」として掲載された。

・ 申請外だが助成課題に関連した活動として、永田町で、野党議員、政党に政策提言。経過は4 . 調査研究・研修の成果に詳述。

6. 今後の展望

観光産業としての日本型エコツーリズムが犯した失敗は、近代以降、特に高度成長以後、急速に空洞化が進んだ、自然と人間との関係を取り戻すにあたって、結局既存の方法論でしか対処し得ていないことに原因がある。それは恐らく、経済原理主義であったり、人間中心主義であったりするのだが、こうした人間の社会や精神の刷新をすることなく、何をしても、結局理念は、ただちに陳腐化し、方法論も大衆化され、既存の大量消費型経済サイクルに飲み込まれるだけであろう。

この問題はエコツーリズム問題に限ったことではなく、特に近年日本で流行している、持続可能な開発論や、自然再生などでも、まったく同じことである。だが酒ばかりを新しくしても革袋が古いままでは、本質的な改善は、漸進的なものですら期待できないだろう。

今後は、エコツーリズム問題についても続けながら、自然と人間との新しい、自然だけに妥協を迫らない真の共存が成立可能な社会の実現に向けて、自分なりに納得できる活動が出来ればと考えている。政治や経済思想といった、所詮は人間社会だけの都合に振り回されず、人間が“いきもの”として、より自然な幸福感を得て暮らせる、そして地球共生系の中で他者を過度に圧迫することなくバランスを維持できるような、そうした何かがもしあるのだとすれば、それに向かって多少なりとも進むことが出来れば、と思う。

高木基金へのご意見

貴基金には、毎度ご面倒をおかけしており、恐縮です。特に事務局の菅波様には、一方ならずお世話になっております。いつもありがとうございます。